

財 団
処理欄

05027

留学・研究計画書

氏名	石井 裕	留学機関名	Faculty of Sanskrit Vidya Dharma Vigyan Banaras Hindu University.
留学先国名	インド	留学期間	西暦2006年8月～2008年7月
研究テーマ（留学目的） インド古典詩学史の文献学的解明のための基礎調査 — 現代インドにおける古典詩学伝統の調査と文献資料蒐集 —			
研究テーマ（留学目的）の説明 （テーマの学術的・社会的意義についても必ず記載してください）			
<p>古典学は、多様な現象面の深層にある鉱脈を掘り出す学問である。</p> <p>ひとたび「国際交流」や「学問の社会的意義」等をキーワードとする議論になると、狭義の人文科学とりわけ古典学と呼ばれる分野は、＜世間＞との遠近を基準とした場合にいささか旗色が悪いようである。だが文化全体を視野に収めた場合、例えば社会科学と呼ばれる現実社会そのものを腑分けする学問分野が十分に機能するためには、当該文化の精神土壌に対する深い理解、すなわち古典学の充実が不可欠であることが正しく認識されているとは言い難い。インドについて言えば、いわゆるサンスクリット文化を対象とした文献学的研究がこれに当たると言えよう。</p> <p>申請者の専攻するインド古典詩学は、サンスクリット語の詩文の制作・批評原理を求めインド独自の発展を遂げた文学理論体系である。この学問はしばしば「修辞学」とも訳されるが、カーヴィヤ文学の完成期すなわち西暦5,6世紀以降、文法学や論理学などと同様に知識人らの基礎的教養とされ、その学習伝統は現在に至るまで連綿と保持されている。またその理論体系は近代インド諸語の文学理論・修辞理論にも転用されたため、インド近現代語による文学全般ひいては現代インドの知識人たちの文章表現法一般にも大きな影響を与えている。従って、インド古典詩学に関する研究は、サンスクリット文化の理解に不可欠であるのと同時に、現代のインド文化を深く理解するためにも、とりわけ重要な意味を持つと思われる。</p> <p>しかしながら文献学的インド学の世界では、インド古典世界の基礎学として本来疎かにしてはならない分野の研究を等閑に付し、例えばインド思想の中では異端とも言える仏教やインド哲学の抽象的問題に関する微細な議論にのみ研究者が性急に向う傾向があり、将来的な研究の先細りが危惧されてならない。インド古典詩学は、このように重要でありながらも研究の遅れが特に懸念される分野である。</p> <p>ではインド古典詩学研究の進展に今何が必要か、と言えば、それはまず重要文献の原典校訂作業の進展とそれに基づいた信頼性の高い翻訳の作成などの、基礎研究の充実であろう。そのためにまず必要な手続きとして挙げられるのが、現代のインドにおいて伝統的バラモン学者（パンディット）らが保持するインド古典詩学の学習伝統の摂取と、文献学的研究の精度向上に必要不可欠な一次資料すなわち写本の蒐集である。これは本邦のインド古典詩学研究の進展において極めて重要な作業であり、申請者はこれを今回の留学目定として設定した次第である。</p> <p>以上の留学目的の達成は、インド古典学研究進展に貢献するとともに、より＜世間＞と肉薄する他の学問領域の仕事と両輪をなすことで、本奨学金の理念に掲げられた＜アジアの発展と真の国際相互理解＞に寄与することを申請者は確信する。</p>			

成果報告書

助成番号：05-007

記入日：2009年3月30日

氏名：石井 裕

留学先国名：インド

研究テーマ：インド古典詩学史の文献学的解明のための基礎調査

— 現代インドにおける古典詩学伝統の調査と文献資料収集 —

研究機関：Sanskrit Vidya Dharma Vigyan Sankay, Banaras Hindu University

留学期間：2006年8月～2009年2月

%%%

はじめに

今回の留学は、報告者が東京大学大学院博士課程において現在従事するインド古典詩学に関する文献学的研究の進展を目的として、古来インドのサンスクリット学習の中心地である北インドのウッタール・プラデーシュ州ヴァラナシ市を拠点として行われたものである。留学期間は2006年8月から2008年7月までの二年間を当初予定していたが、研究の進行状況との兼ね合いで滞在を延長し、結局2009年2月までの都合二年半の留学となった。本奨学金申請用研究テーマの中の「現代インドにおける古典詩学伝統の調査」とは、端的に言えば、インドの伝統的サンスクリット学者(パンディット)たちによるインド古典詩学文献の解説を報告者自身の文献読解の結果と比較・吟味することで当該文献の理解を深めることであり、「文献資料蒐集」とは主にインド各地の図書館や研究機関等に所蔵されている詩学文献に関する写本その他の重要文献を蒐集することである

以下、この留学の経緯、具体的な研究活動の成果、感想を述べてこの留学の成果報告としたい。

1. 留学の経緯

インド古典詩学は、西暦5, 6世紀以降、サンスクリット語の詩文(カーヴィヤ文学)の批評原理を追及して高度に発展したインド独自の文学理論体系であり、インド古典研究の基礎学であるとともに、現代の文学理論や意味論から見ても実に興味深い内容を含んでいる。しかしながらインド古典詩学は、難解な詩文を読みこなす語学力と文学的知識、複雑な理論を理解するための文法学や論理学の関連知識など、その研究に必要な条件を満たすのに費やす時間と労力が膨大で、一朝一夕に研究成果を挙げることが難しいせいか、研究対象として敬遠されがちで専門研究者が極めて少なく、文献学的インド学の諸分野の中でもその重要性に比して不当に研究が遅れた分野となっているのが現状である。そこでこの状況を打破するために最も早急に必要なものは何かについて考えると、それはまず重要

文献の原典校訂作業の進展とそれに基づいた信頼性の高い翻訳の作成をはじめとする基礎研究の充実であると思われる。

以上のような考えに基づき、報告者が研究課題として最初に取り組んだのが11世紀後半にインド古典詩学の理論体系を最終的な完成に導いたとされるマンマタ作の詩論書『詩の光 kaavyaprakāśa』であった。修士論文(2004年:東京大学)ではインド古典詩学史上極めて重要なこの文献の詩学理論を詳細に分析し、その詩学理論の中核をなす第1章から第6章について詳細な訳注を伴う和訳研究をも提示した。この論文は本邦において研究者の手薄な当該分野の研究進展に貢献する意欲作と評され、和訳研究部分の公刊を勧められるなど、それなりの評価を得た。そして博士課程においてもこの文献の研究を続行して研究の精度を高めつつ、修士論文ではなしえなかった文献本文の全訳注を作成してその内容の全貌を解明するとともに、その詩学理論の特性を約二十に及ぶ関連詩学文献の所説との比較検討を通じてインド古典学史の中に位置づけるという『詩の光』の包括的研究を博士論文として目指すことになった。

この研究が斯学の水準を満たすだけの精度をもって完成すれば本邦のインド古典詩学研究を進展させる大きな礎となることは間違いないであろう。この研究の完成に必要な作業自体は、直接の研究対象である『詩の光』自体を含めて、それと歴史的関係をつはずの約二十のサンスクリット詩学文献を順次全て読解してそれらの内容を検討するという、膨大ながらも単純なもので、時間をかけさえすれば一応やり遂げることはできる。しかし問題は文献読解の精度をいかにして高めるかである。そのために必要な手続きとして挙げられるのは、(A)インドにおいて現在もなおインド古典詩学の学習伝統を保持する伝統的サンスクリット学者たちの知識の吸収および(B)文献の正文批判をより厳密に行うための写本の蒐集である。この内の(B)については、狭義の正文批判専門家以外でも随時原典の写本を参照しながら研究を進める必要があるという認識が現在の文献学的インド学研究者の間で一般化してきており、これを怠ると厳密な文献学的研究としての要求水準を満たしていないと見なされるような状況になりつつある。また(A)については、仏教のようにそもそもインドに学習伝統が残っていない分野やその他哲学・宗教文献のようにそれを研究するインド伝統サンスクリット学者と我々の間に目的意識の乖離が甚だしい分野など実行してもあまり意味がない場合もあるが、インド古典詩学のように古典的教養の基礎として強固な学習伝統があり、それを専門とする伝統的サンスクリット学者が数多く存在する分野については大きな効果が期待できる。したがって報告者の研究の質を高めるためには、この二つの作業が有用かつ必要であると言える。ただし、これらの作業を行うとなれば当然ながら現地調査に赴かねばならず、またインド古典詩学研究を始めてから日が浅い頃は多少の粗さはあるにしてもとにかく原典を読み進めてこの領域に関する基礎的理解を得る作業に追われていたため、修士論文段階では無視して将来の課題として残しておいたものである。つまり、自身の研究が進み時宜を得た段階でインドへの長期留学に出てこの課題に本格的に取り組む、というのが、今回の留学の主旨である。

2. 留学期間中の研究活動と成果

留学期間中の実際の研究活動は、(A)受け入れ研究機関の所在地であるヴァラナシ市に居を定めて時間の許す限り当地の伝統的サンスクリット学者たちに師事してインド古典詩学文献の読解を行いつつ、その合間を縫って(B)ヴァラナシ市を始めとするインド各地及び隣国ネパールの大学・研究機関・書店等に足を運び、写本や現地出版物など日本からでは入手困難な文献資料を蒐集するという形で行った。すなわち、この(A)の部分が申請研究テーマ中に本留学の主眼として示した「現代インドにおける古典詩学伝統の調査」に、(B)の部分が「文献資料蒐集」にあたるわけであるが、総じてほぼ満足のゆく成果が得られたのではないと思われる。以下、その成果の概要を記す。

(A) 現代インドにおける古典詩学伝統の調査

一般に「パンディット」と呼ばれるインドの伝統的サンスクリット学者は外国人サンスクリット学者では到底太刀打ちできないほどの膨大な知識量と専門領域への高い習熟度を誇ると言われているが、彼らのそのインド古典詩学理解の仕方を学ぶことで自身の文献学的研究の精度を高めるのがこの調査のねらいである。

今回の留学期間中に主に師事した伝統的サンスクリット学者は五十代前半から七十代後半までの七名で、その多くは報告者の現地受入研究機関であるバナーラス・ヒन्दゥー大学の現職・退職教授であり、少なくとも地元での評判は高い学者たちであった。各人の教授の仕方は、大学内での授業参加という形をとったもの、授業の合間を縫って個人教授してもらったもの、取り決めた謝礼を払って特定文献について学者宅で定期的に講義を受けたものや、無報酬で不特定の文献の問題箇所について随時自由に質問するという形をとったものなど様々であった。ただ、いずれの場合でも報告者が行った作業は基本的に同じであり、博士論文のテーマである 11 世紀後半の詩論書『詩の光 kaavyaprakāśa』に関係する諸詩学文献の内容を原典の本文に即してインドの伝統的サンスクリット学者に解説してもらい、その内容を報告者自身の文献読解から得られた理解と比較・吟味し、その結果を踏まえた上で最終的な自身の理解を各文献の日本語全訳注の作成という形で記録するというものである。そしてその際には、時間的制約から、インド人が通常するような文献の本文全体にわたって一言一句全ての解説を受けることは避け、多くの場合、各文献の中からインド古典詩学史研究の上で重要だと思われる章節や、報告者自身が本文を読解した際に疑問を感じた箇所や当該文献全体の内容把握のキーとなる部分を選んで解説を聞くことにより、彼らのインド古典詩学理解の肝要な点を効率良く確認することに努めた。こうした作業を経て彼らの解釈を一通り調査した上で日本語全訳注まで完成させた文献は次のようなものである。

- ・バラタ作『演劇論 naatyazastra』(4世紀頃?)
- ・バーマハ作『詩の装飾 kaavyaalaGkaara』(7世紀頃)
- ・ダンディン作『詩の鏡 kaavyadarza』(7世紀頃)
- ・ウドバタ作『詩の装飾の精髓集 kaavyaalaGkaarasaarasaGgraha』(8世紀後半)
- ・ヴァーマナ作『詩装飾経註 kaavyaalaGkaarasuutravRtti』(8世紀後半)
- ・アーナンダヴァルダナ作『暗示の光 dhvanyaloka』(9世紀後半)
- ・ルドラタ作『詩の装飾 kaavyaalaGkaara』(9世紀)
- ・ムクラ作『表示機能の母型 abhidhaavRttimaatRkaa』(9世紀末から10世紀初)
- ・ダナンジャヤ作『演劇論 dazaruupaka』(10世紀末)
- ・クンタカ作『迂曲表現の生命 vakroktijiivita』(10世紀後半)
- ・マヒマ・バッタ作『暗示機能考 vyaktiviveka』(11世紀中頃)
- ・クシェーメンドラ作『適切性論議 aucityavicaaracarcā』(11世紀)
- ・マンマタ作『言語機能論 zabdavyaapaaravicaara』(11世紀後半)
- ・マンマタ作『詩の光 kaavyaprakaaza』(11世紀後半)

これらの文献の本文解釈について伝統的サンスクリット学者たちから得た多くの貴重な教示を具体的にこの場で示すことができないのは残念であるが、ともあれ、これらの文献の読解を終えたことで報告者の博士論文のテーマに関係する文献の読解作業は八割方完了したことになる。そもそも二年半という期間でこれだけの文献を読みこなすことは日本にいて様々な雑事に忙殺される状態ではまず不可能なことであり、単に自分自身での読解を終えたただけであったとしても大きな成果であるが、それが伝統的サンスクリット学者たちの解釈をも踏まえた上でなされたことにより、さらに実り多いものとなったと言えるだろう。

(B) 文献資料蒐集

サンスクリット学関係の所蔵資料ではインド国内でも指折りの図書館を持つサンプルナード・サンスクリット大学とバナールス・ヒンドゥー大学を擁し、由緒あるサンスクリット学専門書店が数多く存在する留学地ヴァラナシでの日常的な蒐集活動に加え、ムンバイ、プネー、アーメダバード、バローダラ、パタン、デリー、ラクナウ、アラハバード、コルカタ、カトマンドウといったインド及び隣国ネパールのサンスクリット学の要地を巡る都合五度の研究旅行を実施して、各地の大学や研究機関等の写本関係図書館や専門書店を訪ね、インド古典詩学文献の写本及びその他外国からでは入手困難な現地出版資料等を渉猟した。なお写本の場合は蒐集とは言っても出版物とは異なり、実際には何らかの形での複製の蒐集ということになるが、今回の場合は可能な限り自前のデジタル・カメラによる撮影を試み、それが不可能または料金等の面で困難な場合に限り委託によるゼロックス・コピーなどの形で写本を入手することとした。

最終的にこの留学期間中に蒐集した文献資料はサンスクリット写本約70点、その他出版

資料は 450 点程に及ぶ。この内、写本蒐集については、量的にはまずまずの成果が得られたと思われるが、時に写本所蔵機関側とどうしても折り合いがつかず、目当ての写本の入手を断念せざるを得ない場合も少なからずあり、博士論文作成に関する詩学文献の写本を必要なだけ十分に入手する所まで至らなかったのは遺憾とするところである。その反面、出版資料の蒐集については、外国にはあまり流通しないインド現代語で著された有益な研究書を数多く発見し、また絶版で入手困難と思われた古書を書店の倉庫から発掘することもしばしばあるなど予想以上の収穫が得られたように思う。

3. 留学を終えての感想

二年半の留学期間中、インドを離れたのは、二年目の終わりにヴィザの更新手続きと写本蒐集のため、二週間ほど隣国ネパールに出た時だけだった。そんなわけで帰国後、友人たちには「インドに帰化したって聞いたけど？」などとからかわれ、大学の先生方には「君はよっぽどインドが好きなんだねえ」と半ば褒められ半ば呆れられた。

世にはいわゆる「インド好き」と呼ばれる人たちがたくさんいる。しかしインド古典研究者の中にそういう人は極めて稀であり、長期留学のために渡印しても、酷暑期に帰国するのはまず当然として、それ以外でも何かにつけて一時帰国するチャンスを狙っているくらいが普通だそうである。私自身も別に「インド好き」というわけではなく、収入の心配も無く二十四時間研究に専念することを許されたこの貴重な機会を一瞬たりとも無駄にしないという決意とサンスクリット語の鍛錬に最適な場所に少しでも長くいたいという願いからそうしたに過ぎない。

インドにおけるサンスクリット語は古典語つまり欧米におけるラテン語や本邦における漢文のようなものであり、インド人であっても特別な訓練を受けた者以外はこれを正しく理解することもできないし、自然状態でこれを生活言語として用いる人もまず存在しない。そのせいか外国人は最初から「インドの古代語・死語」という認識のもと「読めればよし」と考えてサンスクリット語学習に向かうため、しばしば専門家ですら辞書と文法書を片手に原文を解読できる程度で満足しているふしがある。確かに、哲学のように純粋に意味内容のみが重要な領域の研究者ならそれでいいのかもしれない。だが、私のように詩文を研究対象とする者にとってそれでは全く不十分であり、やはり現代外国文学研究者程度の水準の語学力は欲しい。そのためには「読み・書き・話す」という立体的な語学訓練が必要になってくるが、サンスクリット語でこれを実行するのは我々にとって非常に難しいことである。しかし私の留学地ヴァラナシはそれを容易く可能にしてくれた。

ヴァラナシは聖河ガンガーの畔にある宗教都市としてあまりに有名であり、古来インドにおけるサンスクリット学習の中心地でもある。とはいえ町中の一般人がサンスクリット語を解するわけではもちろんないが、サンスクリット語を自在に操る力を持ちまたそれを好む伝統的学者・学習者の数は他の地域に抜きん出て多い。そのため、その気さえあれば、

実質的にサンスクリット語のみで生活する環境を整えることも可能である。私自身の場合も、師事した学者たちや友人の学生たちとの間で常にサンスクリット語を用いていたのに加え、下宿先もサンスクリット学校の元校長の家であり、そのの家人とも大部分サンスクリット語でやりとりできた。そのため、町で買物する際などにヒンディー語を使うのを除けば、普段は完全にサンスクリット語での生活を送っていたのである。このメリットを思えば、室内で 40°Cに達する猛暑も、毎日最低八時間の停電も、不殺生・不飲酒の食生活も耐えられないことではなく、おかげでサンスクリット語の語学力に太い筋金が入るのを実感することができた。

このように今回の留学は、インド古典詩学研究という目下の研究活動についても多くの成果を得ることができたばかりか、サンスクリット文学研究者としての基礎能力にも磨きをかけることができ、私にとって非常に実り多いものになった。最後に、この留学の機会を与えてくださった松下国際財団の方々に深く感謝しつつ、この成果報告を終えることにしたい。

写真 1 : 大学の友人たちとディーパーワリー(インドの新年祭)を祝う

写真 2 : 伝統的サンスクリット学者から個人教授を受ける風景

写真 3 : 図書館で資料調査中のひとこま